

# 家庭科における小中連携のための実態調査

——小学生中学生の衣生活・住生活と家庭科の指導の状況——

野中美津枝\*・増子律子\*\*

(2016年10月28日受理)

Survey for Connection between Elementary Schools and Junior High Schools in Home Economics: Wearing and Dwelling Habits among Elementary, Junior High School Students, and Home Economics Teacher's Guidance Situations

Mitsue NONAKA and Ritsuko MASHIKO

キーワード: 家庭科, 小中連携, 衣生活, 住生活

生活体験の少ない現代の子どもたちに、限られた授業時間で効率的に家庭科の指導を行なうためには、子どもたちの実態を踏まえた指導について小中学校で連携していくことが課題である。そこで、本研究では、家庭科の内容項目C領域衣生活・住生活に焦点を当てて小中学生の実態を踏まえた家庭科の小中連携を検討するために、学区の小中学生に衣生活・住生活の実態調査をし、さらに家庭科を担当する教員に指導の状況調査を実施して、家庭科の衣生活・住生活分野の授業を学習する小学生中学生の実態と指導の状況を分析した。その結果、家庭科の授業は、日常的に手伝いや衣生活・住生活で実践していると学習内容を身近に感じられるが、日常的にかかわる機会がないと興味関心を引きにくい。そのため、家庭科の授業では、学習内容を学ぶことへの動機付けと科学的認識が重要であり、家庭で日常的に実践する機会が少ない現状を踏まえ、家庭科の授業の一貫として実践することを課題として取り上げる必要がある。また、小中学校の家庭科担当教員は、家庭科指導について専門的な知識や技能の不足、授業設計などに課題を抱えており、個々の教員の家庭科指導の悩みを小中連携で共有して話し合う場があれば、授業設計についての教材研究やT・Tでの指導の可能性、評価の問題など教育内容や学習活動の量的・質的充実へと向かうことが期待される。

## I. はじめに

平成26年12月の中央教育審議会答申では、小中学校一貫教育を推進し、教育内容や学習活動の量的・質的充実への対応として小中学校の連携が求められている<sup>1)</sup>。家庭科においては、平成20年

---

\*茨城大学教育学部      \*\*鉾田市立新宮小学校

の学習指導要領で内容の系統性や連続性を重視し、生涯にわたる家庭生活の基盤となる能力と実践的な態度を育成する観点から、小学校と中学校の内容構成がA～Dの同一の枠組みとなっている<sup>2)</sup>。しかしながら、多忙な教員が他校種の教育内容を把握したり、他校の教員と教育内容や指導について交流して連携する機会は少ないと考えられる。塩谷・佐藤(2014)が茨城県の小中学校の家庭科担当教員に調査した結果、他校種の指導内容を把握しているのは、小学校教員 17.9%、中学校教員 44.7%に留まり、小中学校で家庭科授業についての話し合い経験が有るのは、小学校教員 50.4%、中学校教員 44.7%だった<sup>3)</sup>。

家庭科は、よりよい生活を送るための能力と実践的な態度を育成することを目指しているが、近年の子どもたちの生活体験の少なさによる生活技能の低下や家庭生活の変化が課題となっている。全国家庭科教育協会による全国的な家庭科教員調査では、家庭科の指導に当たっての課題として、「十分な指導を行なうためには、授業時数が不足している」「勤務校で、家庭科の教科指導について相談する人がいない」「児童・生徒や保護者の生活実態が変化し、家庭の協力が得られにくくなった」などが挙げられている<sup>4)</sup>。家庭科は、授業時数が少ないためほとんどの中学校が一人体制であり、小学校では5年生6年生で家庭科を学習し担任が担当することが多いが、授業時数の少ない家庭科を校内で取り上げて検討する機会は少ないことが推察される。生活体験の少ない現代の子どもたちに、限られた授業時間で効率的に家庭科の指導を行なうためには、子どもたちの実態を踏まえた指導について小中学校で連携していくことが今後一層課題になると考えられる。

家庭科における小中連携について、内容項目B領域の食生活については、小中学生の食生活実態調査から学年を負うごとに家庭で食事の準備や片付けに関わらなくなり家庭でほとんど調理をしていないことが明らかになり、指導者は調理技術が学年を負うごとに上達している可能性がほとんどないことを踏まえて、限られた授業時間で調理体験の回数を増やすために既習事項と新しい学びを組み合わせ、繰り返し体験ができる授業設計を提案している<sup>5)</sup>。

そこで、本研究では、家庭科の内容項目C領域衣生活・住生活に焦点を当てて、小中学生の実態を踏まえた家庭科の小中連携を検討するために、学区の小中学生に衣生活・住生活の実態調査をし、さらに家庭科を担当する教員に指導の状況調査を実施して、家庭科における小中連携ための基礎資料とすることを目的とした。

## II. 研究方法

家庭科の衣生活・住生活分野の授業を学習する小学生中学生の実態を把握するため、鉾田市立鉾田南中学校区の小学校及び中学校で2016年5月に衣生活・住生活に関する質問紙調査を実施した。調査対象者は、小学5、6年生計258名、中学生計403名で、有効回答者数及び有効回収率は、小学生は5年生(男子55名、女子65名)、6年生(男子50名、女子56名)の計226名(男子105名、女子131名)で有効回収率87.6%、中学生は1年生(男子45名、女子44名)、2年生(男子75名、女子69名)、3年生(男子71名、女子71名)の計375名(男子191名、女子183名)で有効回収率93.1%であった。家庭科の担当教員は、小学校12名(男子5名、女子7名)、中学校1名(女子1名)の計13名で有効回収率100%だった。

小学生中学生への調査項目は、①手伝い及び衣生活・住生活の実施状況、②家庭科に対する意識、  
教員への調査項目は、①衣生活・住生活分野で実施している学習活動、②家庭科の指導に関する状  
況と課題、以上について調査し分析した。

小学生中学生への調査項目①手伝い及び衣生活・住生活の実施状況は、家の手伝いや家庭での衣  
生活・住生活の実施状況について「いつもする」「ときどきする」「あまりしない」「しない」の4件  
法で尋ね、「いつもする」割合について学年別、男女別で比較した。②家庭科に対する意識は、家庭  
科の「授業」及び小中学校で共通する学習内容「調理実習」「栄養や食品」「裁縫(ものづくり)」「衣  
服の手入れ」「家庭や家族関係」「家庭生活と仕事」「お金の使い方と買い物」「環境を考えた生活の  
工夫」について「好き」「どちらかといえば好き」「どちらかといえば好きでない」「好きでない」の  
4件法で尋ね、「好き」「どちらかといえば好き」を合わせた好感を持っている割合を学年別、男女  
別、手伝い実施状況で比較した。分析に当たっては、EXCEL統計Ver.7.0を用い、項目間の検定に  
は母比率の差の検定を用い、統計的有意水準は5%とした。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 小学生中学生の手伝い及び衣生活・住生活の実施状況

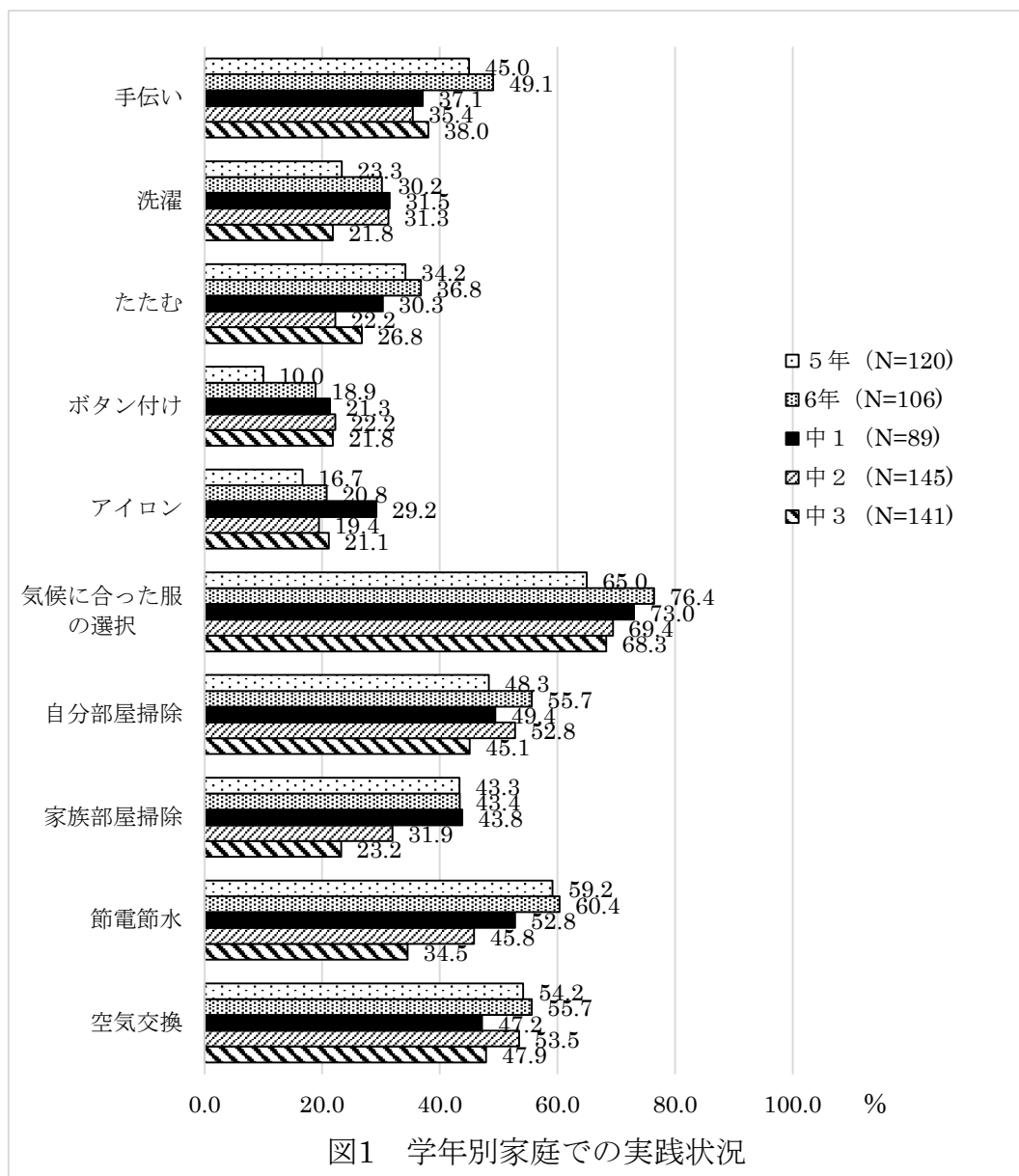
##### (1) 学年別家庭での実施状況

小学生中学生の手伝い及び衣生活・住生活の実施状況について、学年別に比較した結果を図1に  
示す。

手伝いの実施状況は、小学6年生が49.1%で最も実施している。小学校5年生も45.0%と高い  
が、6年生がさらに実施率が高い要因として、小学校家庭科の学習内容項目に「家庭の仕事と分担」  
があることが挙げられる。調査の実施時期が5月と学年初めのため、5年生は家庭科の内容にさほ  
ど入っていないが、6年生では家庭科の学習効果の影響が推察される。一方で、中学生になると部  
活動や塾等で忙しくなるため、手伝いの実施率は一様に下がっており、中学生の手伝い実施率が小  
学生よりも下がるのは各種調査<sup>6) 7)</sup>と一致している。

衣生活・住生活の実施状況をみると、住生活に比べて衣生活に関する実施率が低い。衣生活の実  
施率は全体的に低いものの学年別では、「洗濯」「ボタン付け」「気候にあった服の選択」が5年生か  
ら6年生にそれぞれ約10%の上昇がみられる。これは、小学校家庭科の学習内容項目に「洗濯」「手  
縫い」「快適な着方の工夫」があり、家庭での実践につながっていることが示唆され、「ボタン付け」  
については中学生になっても減少しておらず、習得した技能が維持されている。「アイロンがけ」は  
家庭科での学習経験がない5年生が16.7%と最も低く、6年生になると20.8%と上がり、中学1年  
生で29.2%と最も高い。中学1年生は新しい制服を身につけるようになり、自分でアイロンがけを  
する機会が多くなったと推察される。

住生活の実施状況は、小学校家庭科の学習内容項目に「整理・整頓及び清掃」があることから「自  
分の部屋掃除」が5年生から6年生に上昇がみられるが、全体的に学年を追うごとに減少している。  
中学生は多忙で生活時間に余裕がないため、時間を必要とする掃除については実施している割合が  
低くなることはやむを得ないが、「節電節水」「空気交換」等は時間を要するものではなく、普段の

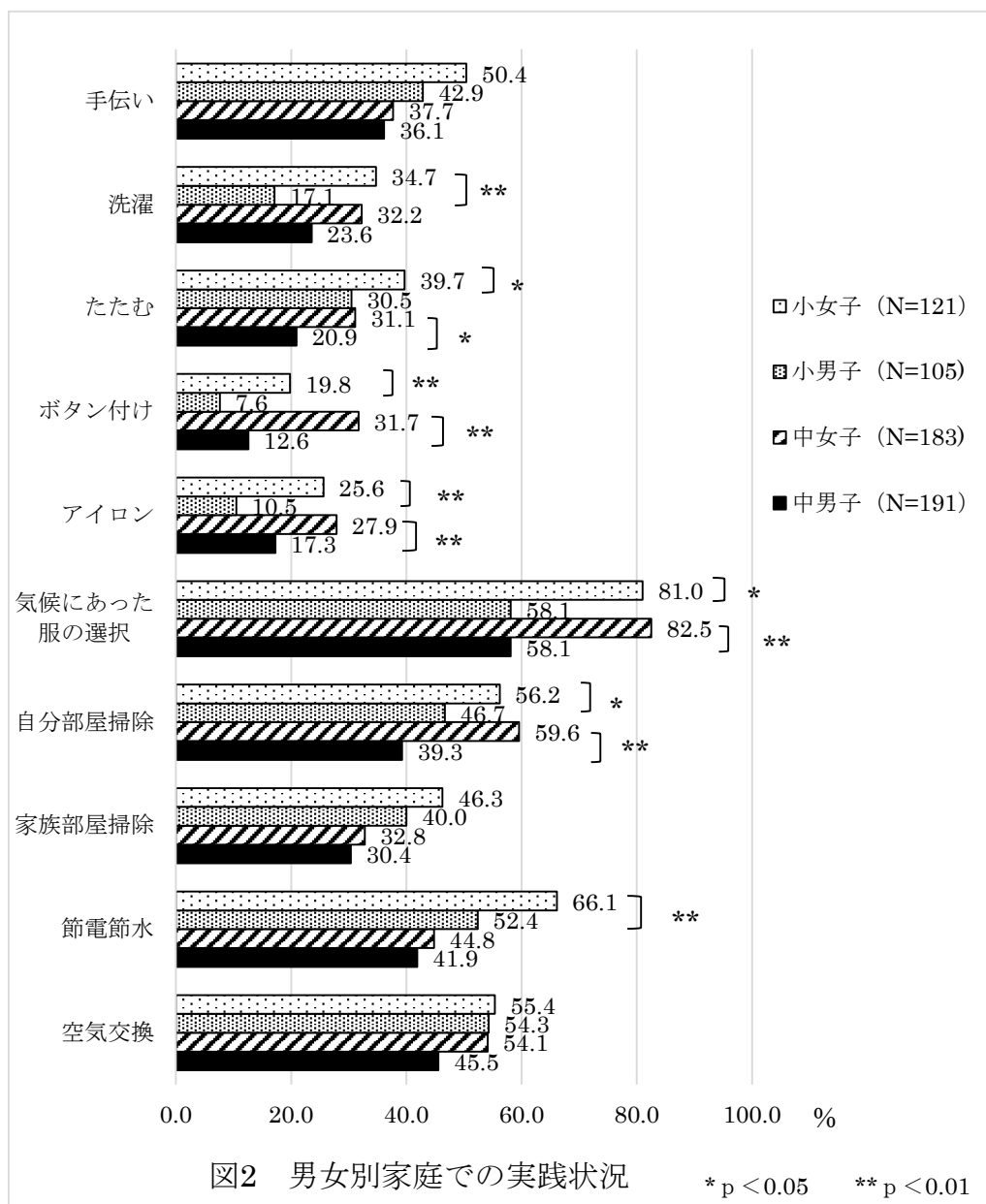


生活の中で意識すれば実行できるものである。家庭科では持続可能な社会に向けて環境教育にも重点が置かれているが、中学生が生活で実践するためには、「なぜ」「どうして」の意識をとらえる授業をして実践的態度の育成が必要と考えられる。

## (2) 男女別家庭での実施状況

小学生中学生の手伝い及び衣生活・住生活の実施状況について、小学生中学生で男女別に比較した結果を図2に示す。

手伝いの実施状況については、小学生女子が最も実施率が高いが、小学生中学生とも男女で有意差はみられない。しかしながら、衣生活の実施状況については、中学生の「洗濯」以外はすべて男子よりも女子の実施率が有意に高い。男子は「気候にあった服の選択」においても小学生中学生と



もに 58.1%に留まり、衣服への関心が女子よりも低く、家庭で衣生活に主体的にかかわる機会が少ないことが推察される。

住生活の実施状況については、「自分の部屋掃除」は小学生中学生とも男子よりも女子の実施率が有意に高いが、それ以外では、「節電節水」が小学生に有意差があるのみで、男女で住生活の実施率に大差はみられない。衣生活に比べて住生活の学習内容は、男女ともに日々の生活に身近で実践しやすいと考えられる。

## 2. 小学生中学生の家庭科に対する意識

### (1) 学年別家庭科に対する意識

家庭科の「授業」及び学習内容について好感を持っている割合を学年別に比較した結果を表1に

表1 学年別家庭科に対する意識調査 (%)

	授業	調理実習	栄養や食品	裁縫(ものづくり)	衣服の手入れ	家庭や家族関係	家庭生活と仕事	お金の使い方と買い物	環境を考えた生活の工夫
小5(N=120)	95.8	96.7	90.0	85.8	81.7	90.0	90.8	93.3	89.2
小6(N=106)	89.6	95.3	88.7	84.0	86.8	91.5	86.8	92.5	88.7
中1(N=89)	89.9	88.8	76.4	78.7	71.9	79.8	86.5	85.4	83.1
中2(N=145)	74.3	89.6	64.6	67.4	58.3	68.8	74.3	77.8	76.4
中3(N=141)	66.2	86.6	66.2	61.3	50.7	58.5	59.9	59.2	64.8

示す。

ベネッセ教育総合研究所による教科・活動の好き嫌いの全国調査(2015)で、小学校家庭科は、小学生の90.2%が好きと回答し小学生が一番好きな教科となり、中学生においても技術・家庭科は、中学生の59.5%が好きと回答し保健体育に続いて二番目に好きな教科となっている<sup>8)</sup>。本調査結果でも小学生中学生の家庭科の授業に対する好感度は極めて高い。しかしながら、中学生は学年を追うごとに好感度が低下し、中学3年生では66.2%まで下がっている。中学3年生では授業時間数が中学1,2年生の半分の年間35時間で週1時間を「技術」と「家庭」で分けるため、家庭科は隔週または半期のみ授業となり、生徒にとって授業の印象が薄くなることが推察される。

学習内容ごとに好感度をみると、「調理実習」が最も高く、小学5年生から中学3年生まで約9割を維持しており、家庭科の授業が好きな要因が調理実習にあると考えられる。その他の学習内容では、学年を追うごとに好感度が下がっているが、「衣服の手入れ」はどの学年も学習内容項目の中で最も好感度が低くなっている。「衣服の手入れ」は、図1より小学生中学生が日常的に実施している割合は低く、興味関心を持ちにくいことが推察される。一方で「栄養や食品」「環境を考えた生活の工夫」は中学3年生でも約65%を維持しており、興味関心が高い。

(2) 男女別家庭科に対する意識

家庭科の「授業」及び学習内容について好感を持っている割合を小学生中学生の男女別で比較した結果を表2に示す。

家庭科の授業に対する好感度は、小学生中学生ともに女子の方が男子よりも高いものの男女で有意差はみられない。しかしながら、学習内容でみると、「裁縫(ものづくり)」「衣服の手入れ」が小

表2 男女別家庭科に対する意識調査 (%)

	授業	調理実習	栄養や食品	裁縫(ものづくり)	衣服の手入れ	家庭や家族関係	家庭生活と仕事	お金の使い方と買い物	環境を考えた生活の工夫
小学男子(N=105)	89.5	92.4	86.7	75.2	71.4	87.6	84.8	91.4	87.6
小学女子(N=121)	95.9	99.2	91.7	93.4	95.0	93.4	92.6	94.2	90.1
検定	-	**	-	**	**	-	-	-	-
中学男子(N=191)	72.3	88.0	67.0	59.2	51.8	62.8	68.6	72.8	73.8
中学女子(N=183)	77.6	88.5	68.9	76.5	65.6	72.1	74.9	72.1	73.2
検定	-	-	-	**	**	-	-	-	-

\*p<0.05 \*\*p<0.01

学生中学生ともに男子が女子よりも有意に低い。図2で男子は女子に比べて家庭で衣生活に関する実施率が低く、主体的にかかわる機会が少ないことが衣生活の学習内容の好感度が低い要因と考えられる。その他のほとんどの学習内容についても女子の方が男子よりも好感度は高いが、「お金の使い方と買い物」「環境を考えた生活の工夫」については、中学男子が中学女子よりも高くなっており、消費生活分野や住生活分野は男子の意識が高い。

### (3) 家庭での手伝い実施状況と家庭科に対する意識

家庭科の「授業」及び学習内容に好感を持っている割合について、手伝いの実施状況（図1の手伝いを「いつもする」群とそれ以外の合計「いつもはしない」群）で比較した結果を表3に示す。

家庭科の授業に対する好感度は、小学生では手伝いの実施状況で差はないが、中学生では「いつもする」81.9%に対して「いつもはしない」70.9%で手伝いを日常的にしている方が家庭科の好感度が有意に高い。家庭科の内容は、生活をよりよく送るための知識と技能を学習するため、日常的に手伝いをしていると学習内容がより身近に感じることができ、習得することへの意欲と必要性を実感しやすいと考えられる。

学習内容でみると、小学生中学生とも手伝いを「いつもする」群の方が「いつもはしない」群よりもすべての学習内容項目で好感度が高くなっている。小学生では手伝いの実施状況で家庭科の授業の好感度に有意差はなかったが、学習内容項目では「調理実習」「衣服の手入れ」「家庭や家族関係」「家庭生活と仕事」「お金の使い方と買い物」が手伝いを日常的にしている群が有意に高い。中学生においては、「栄養や食品」「衣服の手入れ」「家庭や家族関係」「家庭生活と仕事」に有意差がみられ、衣生活食生活だけでなく、手伝いを日常的にすることによって家族とかかわる機会が多くなり家庭や家族関係などの家族分野に対する興味関心も高くなることが推察される。

表3 手伝い実施状況と家庭科に対する意識 (%)

	手伝い状況	授業	調理実習	栄養や食品	裁縫(ものづくり)	衣服の手入れ	家庭や家族関係	家庭生活と仕事	お金の使い方と買い物	環境を考えた生活の工夫
小学生	いつもする(N=106)	93.4	99.1	93.4	87.7	91.5	96.2	96.2	97.2	91.5
	いつもはしない(N=120)	92.5	93.3	85.8	82.5	77.5	85.8	82.5	89.2	86.7
	検定	-	*	-	-	**	**	**	*	-
中学生	いつもする(N=138)	81.9	92.0	76.1	71.7	67.4	75.4	79.7	77.5	76.8
	いつもはしない(N=237)	70.9	86.1	63.3	65.4	53.6	62.9	67.1	69.6	71.7
	検定	*	-	**	-	**	*	**	-	-

\*p<0.05 \*\*p<0.01

## 3. 家庭科指導の状況

### (1) 衣生活・住生活分野で実施している学習活動

銚田南中学校区の小中学校における家庭科授業の衣生活分野、住生活分野で実施している学習活動についてまとめたのが、それぞれ表4、表5である。衣生活・住生活ともに、ほとんどの学校が教科書に沿って体験的な学習活動を取り入れている。しかし、小学校家庭科の学習指導要領における指導計画上の配慮事項として、学習の効果を高めるために2学年にわたっての取り扱いが、平易なものから段階的に学習できるように計画することが求められているが、重複した内容が見受けら

表4 衣生活分野で実施している学習活動

5年	6年	中学校
「ものづくり」 小物入れ ランチョンマット ティッシュカバー 基礎縫いプレッスンキット エプロン	「ものづくり」 ナップザック トートバック  「洗濯・手入れ」 手洗いで靴下を洗う。 // ユニフォーム // 運動会のハチマキ, タスキ	「ものづくり」 ポケットティッシュケース  「洗濯・手入れ」 取扱い絵表示

表5 住生活分野で実施している学習活動

5年	6年	中学校
暖かい着方, 住まい方の工夫 涼しい着方, 住まい方の工夫 教室の照度検査 風の通り道をつくる工夫	夏・冬の住生活の比較 快適に過ごすための工夫 温度や照度計測 掃除の実践	防災マップ作り

れ、発展されていない傾向にある。それは、小学校から中学校への学習にも同じようなことが言える。これらの重複する学習内容や小中の系統性を考えた学習内容を工夫することで小中の学びのつながりをもつことができると考えられる。

(2) 家庭科指導に関する状況と課題

銚田南中学校区の小中学校で家庭科を担当している教員 13 名における家庭科指導に関する状況を表6, 家庭科指導における課題を表7に示す。

家庭科指導に関する状況では、家庭科を教えるのが得意にあてはまると回答したのは15.4%にと

表6 家庭科指導に関する状況 人 (%)

		あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない
1家庭分野を教えるのが得意	男(N=5)	0 (0.0)	2 (40.0)	3 (60.0)
	女(N=8)	2 (25.0)	4 (50.0)	2 (25.0)
	計(N=13)	2 (15.4)	6 (46.2)	5 (38.5)
2ミシン学習を教えるのが得意	男(N=5)	1 (20.0)	0 (0.0)	4 (80.0)
	女(N=8)	2 (25.0)	3 (37.5)	3 (37.5)
	計(N=13)	3 (23.1)	3 (23.1)	7 (53.8)
3調理実習を教えるのが得意	男(N=5)	1 (20.0)	1 (20.0)	3 (60.0)
	女(N=8)	4 (50.0)	3 (37.5)	1 (12.5)
	計(N=13)	5 (38.5)	4 (30.8)	4 (30.8)
4家庭科の授業で学習したことを生活に生かせるような課題を取り上げている	男(N=5)	1 (20.0)	3 (60.0)	1 (20.0)
	女(N=8)	4 (50.0)	1 (12.5)	3 (37.5)
	計(N=13)	5 (38.5)	4 (30.8)	4 (30.8)



表7 家庭指導における課題（複数回答）

課題項目	人
家庭科の指導内容についての専門的な知識や技能の不足	5
実践のための材料や用具の準備	5
指導内容に応じた教材の準備	5
一人一人の興味・関心に応じた題材設定	2
基礎・基本の定着	3
実生活につながる指導	1
その他	2

どまり、男性教員では60.0%が不得意と感じている。特にミシン学習の指導については、男性教員の80.0%が不得意と感じている。家庭科については、戦後小学校のみ一貫して男女共修であるが、中学校では男子向き女子向きで男女で技術と家庭に分かれた期間が長く、さらに高校家庭科に至っては平成6年から男女共修となったがそれ以前は女子のみ4単位必修であった。そのため、男性教員は教員自身が学校教育において家庭科を履修した経験が少なく、大学での小学校免許取得においても実習の経験はほとんどなかったと推測される。実際、男性教員でミシン学習や調理実習を教えるのが得意、家庭科の学習で学習したことを生活に生かせるような課題をとりあげていると回答した1名は30代の男性で、高校家庭科が4単位必修世代であった。家庭科を指導するに当たり、教員自身の学校教育における学びが教員になってからの指導にも影響することが示唆される。

そのため、家庭科指導における課題として「家庭科の指導内容についての専門的な知識や技能の不足」が最も多く挙げられている。また、実習教科ということで、「実践のための材料や用具の準備」「指導内容に応じた教材の準備」の大変さを課題として挙げている。

表8は、家庭科指導における悩み等の自由記述を分析した結果である。調理実習・衣服実習を一人で教えるのが大変でT・Tで指導したいという実習に対する希望、授業設計の困難、授業時数の

表8 家庭科指導の悩み等自由記述

実習	調理・裁縫を一人で教えるのがとても大変。
	実習をする際にT.Tで行ないたい。
	ミシン学習は、限られた台数の中で、時間が有効に使えない。
授業時数	週に1～2時間の学習で定着が難しい。(2人)
指導	専門的な知識がないので、児童の興味・関心をひく授業が難しい。
	授業で使えるワークシート集があると助かる。
	個に応じた指導法。
	教材研究の時間が取れない。(2人)
評価	実習などグループ活動時、児童をよくみないと一部の児童が目立ってしまい、そのまま評価につながるおそれがある。
設備	設備面で準備室がないため作品等の管理が困難。

少なさ、実習における評価の難しさ、設備についての悩みが挙げられている。

#### IV. おわりに

本研究では、家庭科の内容項目 C 領域衣生活・住生活に焦点を当てて小中学生の実態を踏まえた家庭科の小中連携を検討するために、銚田市立銚田南中学校区の小中学生に衣生活・住生活の実態調査をし、さらに家庭科を担当する教員に指導の状況調査を実施して、家庭科の衣生活・住生活分野の授業を学習する小学生中学生の実態と指導の状況を分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

①小学生中学生の手伝い及び衣生活・住生活の実施状況については、中学生は手伝いを小学生に比べてしなくなるが、小学生中学生とも男女で手伝いの実施率に有意差はみられなかった。衣生活は住生活に比べて実施率が低く、特に男子の実施率が女子に比べて有意に低く、男子は家庭で主体的に衣生活にかかわる機会が少ない。住生活に関わる実施率は男女で差はなく、衣生活に比べて住生活の学習内容は日々の生活に身近で男女とも実施しやすいと考えられる。一方で、「節電節水」が学年を追うごとに低下しており、実践につながる環境教育が課題である。

②小学生中学生の家庭科授業に対する意識は、小学生中学生とも家庭科授業の好感度は高いが、中学生では学年を追うごとに低下し特に中学3年生が低く、授業時間数が半減する影響が示唆される。小学生中学生とも男女で家庭科授業の好感度に有意差はみられないが、学習内容では衣生活分野の好感度は男子が女子に比べて有意に低い。また、家での手伝いの実施状況と家庭科授業に対する意識に関連がみられ、日常的に手伝いをしている方が家庭科の授業や学習内容への好感度が高い。

③家庭科指導の状況については、家庭科の指導内容についての専門的な知識や技能が不足しているため、家庭科の指導やミシン学習に対して苦手意識を持っている教員が多く、特に男性教員にその傾向が顕著であった。また、実習教科であるため、教材や用具の準備の大変さ、授業設計や評価の難しさなどが課題や悩みとして挙げられている。

以上の結果から、家庭科の授業内容は、生活をよりよく送るための知識と技能を学習するため、日常的に手伝いをしていると学習内容がより身近に感じることができ、習得することへの意欲と必要性を実感しやすいが、反対に、日常的にかかわる機会がないと興味関心を引きにくいことが明らかになった。そのため、家庭科の授業では、生活経験の少ない子どもたちに、学習内容における自分とのかかわりについて引き寄せていかに学ぶ意義を動機付けるかが課題となってくる。そして、「洗濯」「ボタン付け」「整理・整頓及び清掃」など家庭科で学習した内容が衣生活や住生活における実施率の上昇に影響していることも明らかになり、家庭で日常的に実践する機会が少ない現状を踏まえ、家庭科の授業の一貫として、家庭での実践を課題として取り上げる必要性が指摘できる。また、住生活は衣生活に比べて実施率が高いものの「節電節水」が学年を追うごとに低下しており、日常的に実践するためには、なぜ実践しなければならないのか科学的認識を高める必要がある。

そして、小中学校の家庭科担当教員は、家庭科指導について専門的な知識や技能の不足、授業設

計などに課題を抱えており、個々の教員の家庭科指導の悩みを小中連携で共有して話し合う場があれば、授業設計についての教材研究やT・Tでの指導の可能性、評価の問題など教育内容や学習活動の量的・質的充実へと向かうことが期待される。

## 注

- 1) 中央教育審議会『こどもの発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟勝効果的な教育システムの構築について(答申)』2014年, 4頁.
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説家庭編』東洋館出版社, 2009年, 5頁.
- 3) 塩谷敬子・佐藤裕紀子「家庭科教員の他校種理解に及ぼす異校種間交流の影響と小中連携の課題」『茨城大学教育実践研究』第33号, 2014年, 71-79頁.
- 4) 全国家庭科教育協会『家庭科教育に関する調査—小・注・高等学校における家庭科, 技術・家庭科の授業の充実を図るための課題—』2010年, 7-18頁.
- 5) 野中美津枝・中川篤美・中矢恵美香「食生活の実態調査と調理技術の定着をはかる授業の取り組み」『愛媛大学教育実践総合センター紀要』第30号, 2012年, 51-60頁.
- 6) 国立教育政策研究所『国際数学・理科教育動向調査の2007調査国際比較の概要』2007年, 19頁.
- 7) 公益財団法人日本学校教育保健会『平成24年度児童生徒の健康状態サーベイランス事業報告』2014年, 63頁.
- 8) ベネッセ教育総合研究所『第5回学習基本調査報告書』2015年, 55頁.